

保育事項としての談話に就て

目白幼稚園 和田 實

幼稚園令施行規則第二條には「幼稚園の保育項目は遊戯、唱歌、觀察、談話、手技等とす」とあるだけで、別に談話の内容に就いては、何等の規定もない。従つて、之を如何に解釋するかに困つて、幼稚園の仕事の上に種々な問題を起すことであらうと思ふ。吾人は是に就いて、少し幼稚園の先生方の御注意を喚起したいと思ふことがある。夫れは外でもない。談話の内容としては二つの異つた方面があると云ふことである。一般に幼稚園の談話と云へば「ハハア、童話か」と云ふ様に子供にお話を聞かせることばかりに考へる傾がある。併し、子供に聞かせるばかりが、「談話」ではない。子供に話させることも考へねばならぬ。この子供

自身が話すこと、聞くこと云ふことは、一方は發動であり、一方は受身である。お話を聞くこと云ふことは嘗て直觀したる個々の印象を意識内に再現すると共に之を新に分解綜合してお話の場面を想像するので、其心的過程は受動的に進むものであるが、子供自身が敘述することは經驗の發表であり、心的現象の表現である。一方は新知識の收得であり、一方は己れの抱持せるものを他に傳へることである。従つて其興味も一方は求知的興味である、一方は驚奇感激の發表である。「談話」と云ふ一つの言葉で綜括されることは云ひながら、全然異つた心の方面である。一方は耳に聞くことを主とするものであるが、一方は口に饒舌るのを主と

するものである。其教育的價值から考へても兩者

は全く別なものがあると思ふ。然るに、從來の保育法の本には充分に此邊の注意がしてない。又保育の指導者にも充分に此區別を考へて別個に研究して居る人がない。唯或一部分の幼稚園の先生に月曜日とか、大祭祀日の翌日には、幼児に前日の休みに、如何なる事をしたかと云ふことを問答して、幼児の發表力練習に資することを心掛けて居る人があるだけである。甚だ心細い次第である。云はねばならぬ。殊に、甚だしいと思ふのは堂々たる幼稚園の先生が、此二つの方面を混同して、童話の教育的價值は其經驗意識の表現にありと信じ切つて居られることである。是は、明に受領と發表との教育的價值を混同したものである。成程、兒童自身の敘述は表現であり、發表であるが、受動的に童話を聽聞することは求知的經驗が主たるもので、内的意識の過程が興味を中心たるもので、之を發動的活動たる發表と同時に論ずる譯に

は行かぬ筈だと思ふのである。

斯様に考へて見ると、保育事項としては、談話を二つの部分に別ち甲を童話聽聞とし、乙を経験敘述として、二つの保育事項に分類して考へると云ふことが必要だらうと思ふ。勿論、取扱の上には童話を聽聞させることが經驗を敘述させることよりも、度數に於ても、時間に於ても多量に上ると云ふことは當然のことではあらうけれども、決して、是より輕からざる重要さに於て、經驗敘述をさせなければならぬと云ふことは當然のことの様に思へるのである。

小學校の教育に於て話し方の練習を必要とされて居ることを承知して居る人は幼児にも此方面の練習をさせ様として前に述べた様に、月曜日や大祭祀日の翌日に、前日に於ける幼児の行動を問答するとか、或は、幼児をして童話を話させると云ふ様なことをして居られるが、斯る方面に注意して居らぬ方々は唯、聞かせるだけの研究で幼稚園

保育事項としての能事了れりとして居る様である。且又、一方理論家が幼児に聞かせる童話の價値を、話させる談話の價値と取り違へて居ることに、少しも氣付いて居らぬ様である。科學的研究の盛なる現在の教育者としては少し吞氣に過ぎはしまいか。然らば斯る幼児の經驗敘述は如何なる遊戲形式で行へるか云へば主としては保母と幼児との會話で行はれる。此會話がだん／＼に慣れて來れば幼児同士の對話として、保母は唯、傍聽者の形で出來ると思ふが始めは何うしても先生の誘ひ出しが必要でせう。是れが一番よく行はれる機會は朝幼兒の登園を迎へた其時である。「お早やう」の挨拶と共に保母の迎ゆる笑顔と熱情とは幼兒の重き口舌を滑かにして、簡單なる數次の問答がスラ／＼と取り交はされるに何等の手續も面倒もなく出來ることです。斯様にして幼兒と先生との會話が軽く滑かに取交はされるに連れて幼兒はだん／＼に話し好きになり、時には自ら進んで、色々経験を語り出す様になるものであります。

次には、大祭祀日の翌日とか月曜日とかに前日の幼兒の行動に就いて問答すること、是が相當に効果を上げて來たらば、次には幼兒をして簡單な童話や自己の経験を他の幼兒に話させることが出来る様になるでせう。

斯様にして、童話を聞かせる受領の方面と自己の経験を敘述させる發表の方面とを明かに區別して、其教育的價値の異なるものあるを注意し、別個の材料を以て適當な取扱をしなくては保育事項としての談話の内容が完全しないと思ふのである。學理と實際とは兎角、一致しないことのあるものであるが、之を一致させるのが、吾等此道に關係して居るものゝ任務である。殊に保育法は近年漸く心理學や教育學との關係が密になつて、科學的に教育學に統一される機運に向いて來たのであるから、此仕事に關係して居るものは一層此機運に乗つて、理論的研究を怠らず、凡ての方法を根據ある統一ある組織的理論から演繹する様にせねばならぬことと思ふ保母諸姉の猛省を望む次第である。